〔監修〕
小松左京／紀田順一郎

野十三全集

怪鳥艇

三一書房

海野十三全集
第9巻　怪鳥艇（第2回配本）　**定価1800円**

1988年10月30日　第1版第1刷発行　Printed in Japan

監修者　小松左京
　　紀田順一郎
発行者　畠山　滋
印刷所　日本写真印刷㈱
製本所　東京美術紙工
発行所　株式会社　三一書房
東京都文京区本郷2－11－3
電話 03(812) 3131～5番
振替東京9－84160番
郵便番号 113

落丁・乱丁本はおとりかえいたします　© 1988年
0393－881809－2726

怪鳥艇・目次

豆潜水艇の行方（ゆくえ） 5
大空魔艦（だいくうまかん） 31
大宇宙遠征隊 69
幽霊船の秘密 131
怪鳥艇 169
火薬船 257
解題［會津信吾］ 329

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

怪鳥艇

——海野十三全集・第9巻——

豆潜水艇の行方（ゆくえ）

世界一の潜水艇

みなさんは、潜水艇というものを知っていますね。

潜水艇は、海中ふかくもぐることの出来る船です。わが海軍がもっているのは、潜水艦といいますが、これは世界一のりっぱなものです。潜水艇がりっぱなだけではなく、それにのりくんでいる海軍の士官や水兵さんや機関兵さんたちもりっぱで、これも世界一です。

私がこれからお話ししようと思いますのは、「豆」という名をもった小さい潜水艇の話です。

もっとも、豆潜水艇という名は、この豆潜水艇の発明者であり、これをつくりあげた青木学士がつけた名前ですが、その青木学士と大の仲よしの水上春夫少年は、これを豆潜水艇といわないで、ジャガイモ潜水艇といっています。

ここで、ちょっと二人のこえをおきかせしましょう。二人がいいあっているところは、その豆潜水艇がおいてある青木造船所の中です。

「おい春夫君。君は、この潜水艇のことを、ジャガイモ艇などとわる口をいうが、なぜ、ぼくがいうとおり、豆艇とよばないのかね」

「だって、青木さん。豆というものは、だいたい丸いですよ。ところが、青木さんのつくった潜水艇は、でこぼこしているから豆じゃなくて、ジャガイモですよ」

「でこぼこしているって。なるほど、それはそうだ。舵がついていたり、潜望鏡といって潜水艇の目の役をするものをとりつける台があったり、それから長い鎖のついたうきがとりつけてあったり、すこしはでこぼこしているよ。しかしとにかく、海軍の潜水艦にくらべると、たいへん小さい。豆潜水艇の中のひろさは、バスぐらいしかないから、ずいぶん小さいではないか。だから、豆のように小さい潜水艇、つまり豆潜水艇といっていいじゃないか」

「だって、青木さん。ぼくには、でこぼこしているところが、気になるんですよ。どう考えてみても、やっぱりジャガイモ艇だなあ」

「いや、豆潜水艇だよ」

豆がほんとうか、それともジャガイモがほんとうか。青木学士と春夫君のことばあらそいは、どこまでいっても、きりがつきません。

だから、そのきまりは、もっとあとにつけることにして、私はここで、二人とも、まだ気がついていない一大事について、皆さんにお話いたしましょう。

皆さん、ここは東京の山の手にある大きな洋館のなかです。
森にかこまれたこの洋館は、たいへんしずかです。
窓のそとは、まっくらな夜です。そして、ほうほうと、森の中からふくろうの鳴いているこえがきこえます。
部屋には、明るく電灯がついています。そして三人の西洋人が、大きな椅子にこしをかけて、お酒をのみながら、話をしています。
「むずかしいのは、わかっているよ。しかし、われわれはどうしても、命令にしたがって、やるほかない」
三人のうちで、一ばんえらい人が、英語でそういいました。この人は、たいへんやせぎすですが、一ばんりっぱな顔をしています。
「しかしタムソン部長。あれだけ大きいものをもちだすのは、なかなかですよ」
軍人のように、がっちりしたからだをしている西洋人が、両手を一ぱいにひろげました。この人の顔は、酒のためにまっかです。
「スミス君。われわれは今、大きいだの、おもいだの言っていられないのだ。本国の命令で、ぬすめといわれたのだから、ぬすむよりしかたがない。そうじゃないかねえ、トニー君」
と、タムソン部長は、もう一人の、女のようにやさしい顔つきの青年によびかけました。
「はい。部長のおっしゃるとおりです。命令ですから、やるほかありません。早く、どうしてそれをぬすみだすか、その方法をごそうだんしようじゃありませんか」
「いや、トニーの言葉だけれど、いくらぬすむといっても、かりにも潜水艇一隻だ。あんな大きなものをぬすめると思っては、まちがいだ」
この話から考えると、三人は潜水艇をぬすむ話をしているのです。そしてその潜水艇というのは、じつはさっきお話しした青木学士のつくった豆潜水艇のことなのでありました。だからこれはたいへんです。
「考えれば、きっといいちえが出てくるものだ。およそ世の中に、人間がちえをしぼって、できないことはない。さあ、三人でちえを出そうじゃないか」
と、タムソン部長は、二人をはげましながら、酒のはいったびんをとりあげて、二人のまえのさかづきに、酒をついでやりました。

毒ガス弾

酒をのみながら、ものを考えて、どんなちえが出るで

しょうか。とにかくその夜のうちに、タムソンたちは、ついにある奇妙な方法を考えつきました。
「ははははは、これなら、きっとうまくいく」
「なかなかおもしろい方法ですね」
「いや、考えてみれば、やっぱり方法があるものですねえ」
三人は、たいへん、うれしそうでありました。その喜んでいるありさまから見ると、豆潜水艇をぬすみだすのになかなかいい方法を考えついたようです。いったいそれは、どんな方法であったか、それはしばらくおあずかりにしておくことにしましょう。
それから、十日ほどすぎました。そこで話は、造船所のすみにころがっている豆潜水艇のことになります。
この潜水艇は、すっかり出来あがっていました。艇内には、すでに食べものや、水や、ハンモックなどもつみこまれ、いつでも出かけられるようになっていました。ただ、この豆潜水艇は、まだ台のうえにのっています。艇の下をささえているくさびをはずせば、この潜水艇は、台の上をよこすべりして、ぽちゃんと海へおちて、うかぶようになっていました。つまり、あとは進水式だけがのこっていたのです。
進水式のことを、青木学士も春夫少年も、どんなにか、待ちこがれていました。豆潜水艇は、進水をすませると、そのまま港を出かけることになっていました。もちろん、乗組員というのは、艇長(ていちょう)の青木学士と、それから副艇長の春夫少年の二人きりでありました。
それは、いよいよ明日が、待ちに待った進水式だという、その前日の夜のことでありました。青木学士と春夫少年は、潜水艇の中にはいって、しきりに艇内をとりかたづけていました。
そのとき、このまっくらな造船所へどこからやってきたのかくろい服をきた、十四五人のからだの大きい人が、しのびこんでまいりました。
「あ、部長。あれが潜水艇ですよ。青木学士の発明した世界一小さい潜水艇は、あれなんです」
「おお、あれか。あのぼーっとあかるいのは、なにかね」
「あれは、潜水艇の出入口の蓋(ふた)があいているのです。艇内にはだれかがいて、電灯をつけているから、それが出入口のところから外にもれて、あのように、ぼーっとあかるいのです」
「ああ、そうかね、トニー。しかし、中に人がいるのでは、ぬすむのに、つごうがわるいじゃないか。なぜといって、そうなると、きっと相手がさわぎだすにちがいないからね」
「しかたがありません。すこし荒っぽいが、あいつらを、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ねむらせてやりましょう」
「ねむらせるといって、どうするのか」
「毒ガスを使うのです。みていてください」
トニーは、三四人の仲間をつれて、そっと潜水艇の近くにしのびよりました。トニーの手には、手榴弾のような形の毒ガス弾がにぎられています。
「やるから、みんな、用心をして……」
トニーは手をあげて、合図をしました。それから、豆潜水艇のそばによると、蓋のあいだから毒ガス弾を、えいとなげこみました。
「それ、蓋をしろ！」
トニーの二度目の合図で、うしろにしたがっていた数人の大きな男は、豆潜水艇のうえにとびあがると、ちょっと蓋の中に手をさし入れて、つっかい棒をはずし、蓋を上からおさえて、ぴしゃんとしめてしまいました。
「よし、大出来だ。早く、あれをかぶせろ」
トニーの号令で、うしろに待っていたタムソン部長たちの一団は、懐中電灯をふって合図をすると、くらやみの中から、大きなトラックが、あとずさりをしてきました。
そのうえには、大なバスの車体がのっていました。ぎりぎりと音がして、もう一台別のトラックの上にしかけてあった起重機（重いものをつりあげる機械のこと）から、鎖のついたかぎがおりてきて、バスの車体をつりあげました。そしてその車体を、豆潜水艇のうえに、すっぽりかぶせてしまったのです。
つまり、そのバスは、ちょっとみると、本物のバスのようですが、じつは、車がついていないもので、いわば箱の蓋ばかりのようなものでありました。
豆潜水艇は、外から見ると、まるでバスのようなかたちになりました。
そのうちに、別のトラックが、ぎりぎりと鎖をくりだして、豆潜水艇を、トラックのうえに引きあげました。これはただのトラックではなく、軍隊でよく使っている牽引車というものと同じで、すばらしい力を出すものでありました。
「よかろう。いそいで、出発しろ」
タムソン部長が命令をくだしたので、豆潜水艇を、バスの車体の中にかくしてつみこんだトラックは、そのまま走りだしました。そしてやみの中にかくれると、どこともなくいってしまいました。
さあ、たいへんなことになりました。毒ガスにみまわれた青木学士と春夫少年は、どうなったでしょうか。そして、豆潜水艇は、どこへもっていかれたのでしょうか。

警戒の目

豆潜水艇をつんだトラックは、いま国道をどんどん西の方へ走っていきます。

国道には、お巡りさんが、交番の中から、じっと夜の番をしていました。

もし、国道をあやしいものがとおれば、「とまれ！」と命令して、しらべるつもりでありました。

お巡りさんの前を、豆潜水艇をのせたトラックは、すこしもとがめられないで、通りすぎていきました。

その次の交番でも、やはりおなじように、通りすぎました。

なにしろ、お巡りさんが見ても、憲兵さんが見ても、造船学の大家が見ても、まさかトラックのうえに豆潜水艇がのっていると、気がつくわけがありません。

それもそのはずです。そのトラックの上にあるのは、どう見てもバスとしか見えません。まさかその下に、豆潜水艇がかくれていようなどとは、神さまだって気がつかないでしょう。

トラックは、どんどん国道を西に走りつづけます。

豆潜水艇は、トラックのうえで、ごとんごとんと、ゆれています。

トラックの運転台では、運転手と、その横にのっているトニーという外人とが、英語で話をはじめました。

「トニーの旦那、ちょっとうしろを、みてください」

「なんだって、うしろをみろというのかね」

「なんだか、うしろでごとんごとんといっているが、大丈夫ですかい」

「なに、ごとんごとんといっているって。あ、そうか。ひょっとしたら、豆潜水艇が、車の上からすべりおちそうになったのかもしれない。まてよ、いましらべてやる」

トニーは中腰になって、うしろへ懐中電灯をてらしてみました。

「大丈夫だよ。綱はちゃんとしているよ」

トニーは、バスと車体とをむすびつけている綱のむすび目が、しっかりしているのをみて、安心したのでありました。

そういわれて、運転手は、

「そうですかねえ。しかし、ごとんごとんと、いっていますよ。ふしぎだなあ」

「それは、お前の気のせいだろう」

「そうですかなあ」

運転手の耳には、トニーにはきこえない変な音がかんじるのでしょうか。
しばらくたって、運転手はまたトニーにはなしかけました。
「あ、またきこえた。トニーの旦那、いままた、大きくごっとんと、うごきましたよ。ああ気持がわるい。そのうちに、豆潜水艇が、道のうえに、ころがりおちてしまいますよ。もういちど、よくしらべてください」
「大丈夫だというのになあ」
トニーは、もういちど、綱のむすび目をよくしらべました。しかし、さっきと同じで、べつにとけた様子もありませんでした。

くらい海

そのうちに、トラックは、大きな川っぷちにつきました。
石垣の下に、だるま船が待っていました。
岸から板がわたしかけてありましたから、トラックのうえのにもつであるバスは、しずかに板のうえへおろされ、そしてだるま船の中につみこまれました。

「オーライ。さあ、早いところ、でかけよう」
トニーが手をあげると、だるま船は、すぐエンジンをかけました。
一同は、だるま船の中にのりうつりました。だるま船は波をけたてて、川下へくだっていきました。
くらい川の面には、このだるま船の行く手をさえぎるものもいません。
「しめた。水上警察も、こっちに気がつかないらしい。さあ、どんどんいそげ。本船じゃ、まっているだろうから」
だるま船は、川口を出て海に入ると、こんどはさらに速度をあげて、沖合へすすんでいきました。
「トニーの旦那、針路は真南でいいのですかね」
「まあ、しばらく真南へやってくれ。そのうちに、無電がはいってくるだろうから、そうしたら、本船の位置がはっきりする」
トニーは、舳に腰をおろして、しきりに受信機をいじっていました。
それからしばらくたって、トニーが、耳にかけていた受話器を両手でおさえました。
「あ、本船が出た。エデン号だ」
トニーは、耳にきこえるモールス符号を、すらすらと書きとっていましたが、そのうちに、彼も電鍵を指さき

で、こつこつと、おして、なにごとかを無線電信で打ちました。
　そうして、両方でしきりに通信をかわしていましたが、やがてそれもおわりました。
「おい、わかったぞ。左舷前方三十度に赤い火が三つ櫓に出ている船が、われわれを待っているエデン号だそうだ。船をそっちへ向けなおして、全速力でいそげ」
　トニーは、舷をたたいて、そうさけびました。船は、向きをかえると、出るだけ一ぱいの力を出して、くらい海面をいそぎました。
　エデン号に行きついたのは、それから約二時間のちのことでありました。
「エデン号かね。こっちはタムソン部長の命令で、豆潜水艇をつんできたトニーだよ」
「おう、まっていた。トニー君。大へんな手がらをたてたものだな。わが海軍でねらっていた青木学士の豆潜水艇を、そっくり手に入れるなんて、この時局がら、きつい手がらだ。あとでうんと懸賞金が下るだろうぜ」
「その懸賞金が、目あてさ。その金がはいれば、おれは飛行機工場をたてるつもりさ」
「ははは、もう金のつかいみちまで、考えてあるのか。手まわしのいいことだ、ははは」

あぶない荷あげ

「さあ、その大したえものを、こっちの船へ起重機でつりあげるから、お前たち、下にいて、ぬかるなよ」
「おい来た。大丈夫だい。まずこのバスがめんどうだから、そら、みんな手をかせ。こいつを海の中へ、たたきこんでしまうんだ」
「よし、みんな手をかせ」
「うんとこ、よいしょ」
　だるま船の中では、豆潜水艇のうえにかぶせてあったバスの車体を、みんなでもちあげました。
　そして、舷のそばまでもっていって、よいしょと海中へなげこみました。大きな水音がすると同時に、船がぐらっとゆれました。
　いきおいあまって、二人ほど、海中へおちこんでしまいました。しかし、いずれも船へおよぎついてきました。
　さあ、それからいよいよ、豆潜水艇を起重機でつりあげる作業です。
　本船からは、起重機の腕が、ぐっとだるま船の上にのびてきました。そしてその先から、くさりがじゃらじゃ

らと音をたてておりてきました。
「困ったなあ。この潜水艇は、丸いうえにすべっこくて、くさりをかけるところがありゃしないよ。トニーの旦那、どうしましょう」
「どうしましょうといって、どんなにしてもつりあげなくちゃ、せっかくのえものが、役に立たんじゃないか」
「でも、こいつをくさりでつりあげるのは、ちょいと大へんですぜ」
「ずるをきめこまないで、さあ、くさりをこういうぐあいにかけて、むすんだむすんだ」
「こういうぐあいにですかい。そんなぐあいにいくかな。なんだか、あぶないと思うが……」
「やれ。やるんだといったら、やるんだ」
トニーがしかりとばすので、みんなも仕方なく、大汗を出して、くさりを豆潜水艇にぐるぐるとまきつけました。
「おーい、まだかい」
本船では、どなります。
「もうすぐだ。よし、起重機のくさりをまけ」
「おいきた」
がらがらと、起重機のくさりがまきあがっていきます。やがて、くさりはぴーんとはり、豆潜水艇はしずかに、だるま船の上につりあげられていきました。
「うまくいった。そこで起重機をまわして……」
起重機は、豆潜水艇をつったまま、本船へ、横にぐっとまわしはじめました。
「あぶない！」
だれかがさけんだのです。
そのときはもうおそかった。豆潜水艇をつったくさりが、ぎしぎしなると同時に、くさりはすべり、豆潜水艇の胴から外れました。あれよというまに豆潜水艇は、がたんとかたむき、そして次ぎの瞬間には、艇はくさりからぬけ、大きな水音をたてて、海の中におちてしまいました。
さあ、たいへん。せっかくのえものが、海底へおちてしまったのです。

豆潜水艇の中

さあ、たいへんなことになりました。
みなさんがごしんぱいの豆潜水艇は、まっくらなふかい海のそこに横たおしになってねています。
あたりの海底には、林のように藻や昆布るいが生いしげっていて、これがひるまなら、そのふしぎな海のそこ

の林のありさまや、ぶくぶくと小さな泡が上の方へつながってのぼっていくのが見えるはずですが、今は夜中のこととて、何も見えず、一切まっくらです。

さあ、豆潜水艇は、もうたすかる道はないでしょうか。中にのっている水上春夫君と青木学士は、今どうなっているでしょうか。二人とも、怪しい外人のなげこんだ毒ガスにやられて、冷たくなっており、いま海のそこにねていることにも気がつかないのではないでしょうか。ところが、そのときです。とつぜん豆潜水艇が、ぱっと黄色い二つの目をひらきました。

いや、それは本当の目ではありませんでした。それは豆潜水艇の横腹についている、丈夫なガラスをはめた窓に、あかりがともったのであります。もちろんそのあかりは、艇の中にあるあかりです。窓から外へ、さっとながれだした黄色い光が、すこしずつうごいて、海藻の林をてらしつけます。その間にねむっていた鯛のようなかたちをした魚の群が、とつぜん、まぶしいあかりにあって、あわてておよぎはじめました。まるで銀の焔がもえあがったようです。あかりは、なおもすこしずつうごいていきます。

はてな、一たいどうして豆潜水艇の中にあかりがともったのでしょうか。

そうなると、豆潜水艇の中を、ちょっとのぞいてみたくなりますね。では、のぞいてみることにしましょう。

豆潜水艇の中は、うすぐらい電灯ててらされていました。

ごっとん、ごっとん、ごっとん。

重い機械がまわっているらしく、かなり大きな音がしています。それはエンジンとポンプとが一しょにまわっている音でありました。

水上春夫君と青木学士は、どこにいるのでしょうか。

あ、いました。二人は、豆潜水艇の舳に近いかべに、いもりのように、へばりついているのでした。

「青木さん。海のそこは、きれいですね」

「ああ、きれいだよ。しかし春夫君。今は、きれいだなあなんて、かんしんしていてはこまるよ。できるだけ早く、ここをはなれないといけないのだ。これで、あたりの海のそこのようすは、だいたいわかったから、すぐに艇をうごかそう。さあ、君も手つだいたまえ」

「ええ、こうなったら、どんなことでもやりますよ」

「では、もう外のあかりをけすよ」

スウィッチの切れる音がしました。そしてさっきからうしろ向きになっていた二人は、かべからはなれて、こっちを向きました。

二人は、防毒面をかぶっていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com